

安政五年三月十九日

七八二

箱館ヨリ來書

十四日、晴、早曉服部氏同道、場所へ罷越、船匠庄七死す、○余々未の刻場所出立、薄暮後歸邸、服部氏残置、○今日より松尾保次、場所を遣ス、

十五日、晴、風烈、

十六日、晴、船造所に詣り、船匠庄七死後之諸向を取調ふる、

十七日、晴、右同所に滞留、

十八日、晴、今日戸塚氏船造所を來る、同行、歸邸酉ノ刻着、

十九日、曇、未の刻方雨、夜に入り雨止む、寒甚、十月十二日出、雨浦書翰來る、

今未の刻より船造所に至る、途中雨甚、品川ニ止宿、

二十日、好晴、今日船造所ニ於て、敷すへの内祝を行ふ、

二十一日、曇、午前服部氏同行、歸邸酉の刻、

二十二日、晴、昨夜寒ニ入、今日却て暖和なり、

今夕大野より狀箱着、異條なり、

二十三日、雨、暖和なり、今日大野便仕廻書翰出す、

二十四日、晴、暖和なり、早天力石勝之助を訪ふ、謁せず、蒲燒料を遣す、夫より福藩中根氏を訪ふ、若一箱を送る、今曉服部氏船造場へ、藤三郎召連罷越、今夕田村士を招き酒を斟、

二十五日、曇、時々微雨降る、晝後方大雨、今日場所へ往く、夜に入り大風雨、船造場屋根余程損す、

二十六日、晴、服部氏場所より歸る、

二十七日、雨、函浦より書翰來る、

二十八日、晴、服部氏場所を來る、

二十九日、雨、終日不止、晝前場所出立歸邸、藤三郎召連る、

晦日、晴、藤三郎へ命、金百五拾兩場所へ送る、

十二月

朔日、晴、大聖寺藩東元吉來る、○西川岩アールを送る、今朝札留守をして新藤氏を訪はしめ、函館に書翰を出し、且注文之判四通りを送る、

銅板ノコト

早川彌五左衛門ノ書至ル

二日、晴、風氣なる終日他出せず、夕方兩國蒸風呂へ行、○途中銅板之事を取調る、

三日、晴、早曉岡久米・吉拙・高謙三人を伴ふて、船造場へ行く、○日暮より雨降り、夜に入り甚、夜半雨止む、

四日、晴、午後方服部氏、江戸に歸る、

五日、晴、藤三郎を江戸に遣し、明日歸る事を命す、

六日、晴、藤三郎、大聖寺藩東元吉を案内いゝ、午前場所を歸る、右東方氏八ツ時過歸る、

七日、晴、夕七ツ時過、伊勢屋吉次郎場所へ來る、

八日、晴、晝頃場所出立江戸に歸る、日暮着邸、大坂方早川彌五左衛門書翰來る、

九日、晴、

十日、曇、今日晝過服部氏場所へ行、○金比羅へ參詣、夫方時計師又吉を訪ふ、○夜ニ入雨、

十一日、雪甚、晝比方晴、今朝新藤様を訪ひ面謁、種々相談す、歳末之祝儀を送る、○設樂氏を訪ひ奉書翰を送り、御用人に貳百疋を贈る、○齋藤氏を訪ひ貳百疋を送る、○夕方中根氏來訪、船造場へ行く事を議し、明後十三日早天、出宅を約す、今日函館方書翰來る、

十二日、晴、晝後品川迄罷越、

十三日、晴、品川宿早曉出立、大森なる待合、福井中根氏・三岡氏同道、船造場へ罷越、余ハ滞留、右兩士ハ晝後歸

安政五年三月十九日

七八三

安政五年三月十九日

七八四

箱館ヨリ來書

十四日、晴、今日晝後服部氏、江戸に歸る、
 十五日、晴、今朝藤三郎を江戸に遣し、金百兩を取寄せ、諸職人其他拂方を差出す、○今日新藤様手翰、並函浦方十一月廿二日立之書翰、藤三郎持參し來る、
 十六日、晴、夕方曇、田村士・滿田祐・中村大、場所を來る、即日歸邸、余も夕方曇甚しき付、明朝之雪を畏れ品川へ罷出、日暮に付投宿、
 十七日、雨、午後雪、品川早曉出立、四ツ時前歸邸、今日大野方便有之、
 十八日、晴、今朝大橋宥之助を訪ひ、種々申談、箱館丸へ之點書を請取來る、大橋旅宿、小石川牛天神下水道端森本柳太郎、
 十九日、曇、今日公邊方出候御書付類に付、明朝立大野表へ態飛脚立る、但し八日振之、今夕方服部氏、船造所を罷越、
 二十日、晴、夕方吉摺を招き酒を酌む、
 二十一日、晴、今朝函浦行之書翰、新藤様へ差出し、且大橋様船造場見廻り之義を頼み遣す、○今朝伊勢屋吉次郎來る、造船之義申談、其外種々申談、
 廿二日、少曇、早曉服部氏場所を歸る、○午後余場所を行く、
 廿三日、晴、
 廿四日、晴、早曉場所出立、大工四人鑿吉・利吉・健・外次三郎・水主貳人・鍛冶壹人召連、品川伊豆屋善之助に船申付、服部を江戸方來り同道なる箱館丸御船拜見、詰合之御役人鈴木謙助殿・酒匂敬三郎殿、右兩人に菓子料百疋を遣す、晝後未の中、品川へ上陸、夫方川崎屋なる一統へ酒遣し、服部を江戸に歸り、余ハ場所へ立戻る、○今日伊勢吉、場所

箱館丸ヲ見ル

〜來る、

廿五日、晴、場所を逗留、
 廿六日、晴、夕方曇、今日大生氏場所へ來る、余も同行なる、夜に入歸邸、服部氏・大生氏と同行、場所へ來る、○今日箱館役所方御留守居呼出し有之、船引請之義、伺濟相成る、書面別紙に有之、
 二十七日、雨、雪を雜ゆ、○今朝札留守、船引請之義に付、堀田備中守様を御届差出し、且淺山父子三人支度金御渡之義に付、御城に罷出る、○今日御家中に、御取扱被下申渡相濟、
 二十八日、晴、夕方方雨を催す、○早天大橋宥之助を訪、造船之事を談す、
 二十九日、雨、早天力石勝之助殿方へ罷出、大橋氏並棟梁豊次、造船場へ見廻り之義相願ひ、尤書面差出す、○晝前服部與右衛門、場所を歸る、○日暮力石方明朝可罷出旨手紙來る、
 晦日、晴、早天力石殿へ罷出面會、昨日相願置候大橋氏・豊次見廻り之義、達置候段御聞濟之旨挨拶有之、
 安政五年戊午、

正月 小 日曜、

朔日、好晴暖和、例刻禮服にて出仕、異状なし、
 二日、曇、早天力石君・新藤君・齋藤氏・中根氏に詣り、年初を賀す、○午後大橋氏來訪、船造場へ行くを談し、五日を期す、
 三日、雪、昨夜より雨雪に變じ、朝來一尺余雪堆し、風も亦烈なり、終日雪不止、○今朝服部氏雪を侵して場所を往く、
 四日、晴、今朝大石竹藏を場所を遣す、緊用に付る之、藤三郎場所より來る、
 五日、半晴、今朝大橋宥之助并吉田拙藏同道、場所へ行く、箱館大工豊次外壹人も來る、藤三郎召連る、

船引請ノ届

安政五年三月十九日

七八五

六日、曇、寒甚し、大橋井吉田・服部舟之箱館丸に立寄出懸候處、風順潮不宜に付立戻り、場所之止宿、
 七日、曇、時々雪降る、今朝大橋井吉田陸路罷越、外大工も同斷、○服部氏も又歸邸、
 八日、晴、
 九日、晴、昨夜水主武兵衛心得違に付、江戸へ遣し、押込申付る、
 十日、晴、晝比場所出立、余も歸邸、七ツ半頃歸着、大野方昨日便着來翰有之、箱館よりも同斷來翰、
 十一日、晴、今晝後服部氏、場所へ行く、
 十二日、晴、早天新藤様へ罷越、留守に付不調、福井中根氏に書翰出、唐太日誌并龜圖返る、
 十三日、晴、午後方場所へ行、
 十四日、晴、
 十五日、晴、松尾保次、場所方江戸へ行、
 十六日、曇、
 十七日、大雨、松尾保次、江戸方歸る、○大工利吉、豆州に罷越、
 十八日、曇、夜に入雨、○今朝服部氏木材之儀に付、在邊へ罷越、○余も今晝後場所出立歸府、○今日大野方間便來
 十九日、晴、
 二十日、曇、微雨來る、夜に入雪、○今夕服部氏歸府、
 二十一日、雪、二寸計降る、○今朝新藤様へ書面差出ス、返書來る、
 二十二日、晴、
 廿三日、晴、今朝新藤様へ罷出、種々申談置、

廿四日、雨、風も甚し、早天服部氏同道、場所へ行、
 廿五日、晴或ハ曇、今日場所方服部氏豆州へ罷越、
 廿六日、晴、場所に伊勢吉使來る、
 廿七日、曇、時々雪降る、○晝立たる歸府、
 廿八日、晴、夜に入雪、今日金七百兩、伊達淺之助へ松井甚八を以爲持遣し、預り紙取來、伊勢吉、鉄屋忠兵衛來る、
 廿九日、雪三四寸降る、○今朝新藤様へ、金七百兩之伊達方遣し候證文、爲持遣し、爲替手形を頼遣す、○藤三郎場所
 方來り、服部氏書翰來る、晝立たる吉田拙藏差添、藤三郎場所へ立歸る、金七拾五兩相渡、明朝藤三郎へ小田原行を
 命す、○今日終日雪降、凡壹尺余、

二月

朔日、晴、寒甚し、今朝新藤様へ爲替手形白木狀箱入を遣す、○且別に木地挽職人七人之手當并旅中入用金七拾兩
 を新藤様方受取、右受取紙を遣す、○鉄屋忠兵衛、碓師五左衛門來る、
 二日、曇、寒甚し、今朝河津殿へ罷出、面談之及ぶ、○吉田拙藏書後場所方歸る、無別條、
 此節よりハ、船造晝夜となく混亂なる、日記に認る事も難成程の多事よる、午年十二月晦迄之日記を、別冊に記し置
 め、追る書加ふ、

二十日丙申老中堀田正睦備中守○ヲ小御所ニ召シテ、外交措置ニ關スル前
 日ノ朝旨ヲ宣シ、猶、三家以下諸侯ノ意見ヲ奏シテ、再ビ勅裁ヲ請ハシ
 ム。

〔御沙汰書〕

○宮内省圖書寮所藏本
○實記所載

安政五年三月二十日

七八八

○三月二十日老中堀田正睦へ

三月二十日、略、夕方左府公入來、對面、又少々御返答振替り候間、一紙ヲ被爲見候、先是ニテ御治定ト申事也、○癸
 三月廿日、亞夷一條御返答之儀、略、御返答、折紙、御趣意書之事、○筆者久我、○尙忠、○公記
 戊午三月廿日、於小御所、被 仰出候 勅答之寫、○防衛
 三月廿日、堀田侯ヲ 禁中ニ被召、御渡相成候書付寫、○井伊家
(三月)
 去ル廿日、略、御返答、左之通被 仰出候旨、○安政戊
 三月廿日、勅答之御書付、○高麗
○亞案件
 三月廿日、勅答之書付寫、○亞案件
○雜記
 安政五年三月廿日、於小御所、被 仰出候、勅宣之寫、○御書

墨夷之事、

神州之大患、國家之安危ニ係リ、誠不容易、奉始
 神宮、御代々へ被爲 對、恐多被思召、
 東照宮已來之良法ヲ變革之儀ハ、闔國人心之歸向ニモ相拘リ、永世安全難量、深被惱
 叡慮候、尤往年下田開港之條約、不容易之上、今度假條約之趣ニテハ、
 御國威難立被
 思召候、且諸臣群議ニモ、今度之條々、殊ニ

申ネテ三家
以下諸侯ノ
意見ヲ徵シ
奏聞セシム

御國體ニ拘リ、後患難測之由言上候、猶三家以下諸大名へモ、被下
 台命、再應衆議之上、可有言上被 仰出候事、

右三月二十日、略、自左府公堀田備中守ニ被相渡、○中山忠
○能手記

(尙忠公記 中山忠能手記 菅業 亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌 野宮家文書 伏見宮侍御牧家諸留)
(防海雜記 井伊家祕書集錄 安政戊午祕笈 高麗環雜記 亞案件彙草稿 宮信敏涕泣輯書 平安戊午記事)

〔左大臣近衛忠熙口達〕○伯耆藩本實領所藏本

○三月二十日老中堀田正睦へ

三月二十日、略、左府公口上、○中山忠
○能手記
 三月廿日、略、御口達、○平安戊
 三月廿日、堀田備中守、御所ニ 御召有之、則參 内有之候所、於小御所、○中、近衛殿、被 仰渡候御口上、○伏見宮侍
 三月廿日、略、入夜自中山大納言、御返答書被傳越、○中、御口上、○菅
 三月廿一日、略、回文到來、昨日被相渡候 御返答寫、○中、御口上、○亞墨利加國人願立
(三月)
 去ル廿日、略、御返答、左之通被 仰出候旨、○中、別段御口達、○安政戊
 午三月廿日、御用召ニ付、堀田殿、本多殿御同道御參 内之處、○中、別段近衛殿御口上ニ在、○御尋
 三月廿日、於小御所、略、備中守ニ、○中、別段近衛殿御口達ニ在、○水操
 午三月廿日、於小御所、略、別段近衛殿御口上ニテ、○見聞
○雜錄

先日之御返答、彼是御延引ニ相成候、早々歸府之上、大樹公へ申入候様、被 仰下候事、

安政五年三月二十日

七八九

歸府シテ將
軍ニ復命セ
シム

安政五年三月二十日

〔中山忠能手記 菅葉 野宮家文書 伏見宮侍御牧家諸留平 安政戊午秘笈 遇得即錄 水操開集 見聞雜錄〕

七九〇

〔議奏加勢中山忠能廻達〕

○亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜話所載

○三月二十日權大納言大炊御門家信等へ

三月廿日、○野宮家文書

三月廿一日、丁酉、晴、從大炊御門、回文到來、昨日被相渡候、御返答寫之、○亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜話

關東に御返答書、別紙之通、堀田備中守に被相渡候之付、寫武傳被傳候、仍入見參候、早々御廻覽可返給候也、

三月廿日

忠能

大炊御門大納言殿

新〔近衛忠房〕

大

權〔西江公經〕

中

日野〔鳥丸光政〕

三〔正親町三條實愛〕

中

正親町〔實徳〕

中

甘露寺〔愛長〕

新〔八條隆彰〕

中

醍醐〔忠順〕

中

新〔藤田重胤〕

冷泉〔爲理〕

宰

別〔日野實忠〕

當

宰〔野宮定功〕

源〔中院通富〕

中

右宰相〔備本實繼〕

殿

新〔廣橋胤保〕

頭

辨

頭〔兼長長頼〕

右大辨殿

右書付、○中、今日、召備中守、於小御所、殿下・三公・兩役列座、左府公被渡之、其後、寫廻覽之、○野宮家文書

右、甘露寺に傳達了、○亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜話

〔野宮家文書〕

〔老中堀田正睦書翰〕

○千葉縣内務部編 堀田正睦所載

○三月十六日武家傳奏廣橋光成宛

三月十六日、安政一書を廣橋傳奏に贈りて、○中、勅答の下付を促がす、其全文左の如し、

此度御使被仰付上京仕候儀、是迄に先例無之大事にて、治亂盛衰此一舉に係り候、一通り御祝儀之御使に上京仕候者など之御常例を以、御取扱被下候儀には無之段は、申上候迄も無之候得共、去月五日、京着より只今迄、四十日餘にも相成條約之期も相後れ、此後如何様之次第に成行可申哉深く痛心仕候、去ル五日關東より之御請差上候上は、無程勅答被仰出候儀と謹で相待候處、何之御沙汰も無之、去ル十二日禁裏付を以參内御日限、十四日・十五日・十六日之内差支も無之哉之御沙汰に付、何之差支も無之、少しも早く參内仕度旨御挨拶に及候、然ル處只今以何之御沙汰も無之、如何之御模様は御座候哉、不肖之私には御座候得共、大任を受大切之御使に罷越、私申上候は即公方様御口上に候、參内御日限も御沙汰有之、又御沙汰止に相成候は、乍恐何分心得難く候、此には定て御故障之筋出來候て、御所内御紛擾にも可有之哉、右に付種々風説も有之、就ては人氣も立候て甚心配仕候、前申上候通平常之御使に候はば、二月、三月、乃至半ヶ年にて、謹で勅答を相待候筈に

安政五年三月二十日

七九一

滞京既二四
十日ヲ過ケ

參内日限ノ
變更ハ廟議
ノ紛糾ニヨ
ルカ

速ニ勅答ノ
降下ヲ請フ
不審ヲ抱ク
公卿ニハ堀
田自身説破
スベシ

候得共、此度は全御國之事のみならず、外國に關係仕候故、機會後れ候ては臍を嚙候悔
に至り可申、片時も早く勅答無之候ては、只今にも英吉利軍艦渡來仕候はゞ、不都合至極、
彌事六ヶ敷相成可申、治亂盛衰之間、髪を容れざる場合に候、何卒早々勅答被仰出候様宜
御執成奉願候、苦しからざる儀に候はゞ、私兩殿下に罷出、事情詳悉に可申上、たとひ至尊
之御前なりとも罷出一々可申上候、又御大政に關はらざる人々議論等申つもの候者も有
之候はゞ、旅宿へ被相越候様いたし度、一一説破可致、又召連候御役人より一々説破爲致
候ても宜、何分古語之通り、言を發し庭に盈る云々之通りにては結局無之、悠々日子を過
し候内、大事既に去り可申、長嘆息仕候、此段御手限り愚意申述候間、宜御執成、早々埒明
候様奉願候事、

〔議奏萬里小路正房通達〕

○内閣記録課所藏本
武家書翰往來所載

○三月十九日禁裏附大久保忠良等宛

明二十日巳剋、堀田備中守、本多美濃守同伴、參 内被
仰出候、仍爲心得申入候、以上、

三月十九日

萬里小路大納言

大久保大隅守殿

堀田正睦ニ
參内ヲ命ズ

都筑 駿河守殿

〔非藏人日記〕

○東京帝國
大學所藏本

三月十九日、乙未、晴、略、○中

一 明廿日巳剋、老中堀田備中守、諸司代本多美濃守同伴參 内、賜酒饌之旨傳奏衆被申渡、
議奏衆々も同様被申渡、令壁書、

一 明日出向、松尾伯耆・富田伊豆等書認、傳奏衆に附進、○中略、

廿日、丙申、晴、當番議奏大藏卿殿、厥他參集、傳奏廣橋前大納言殿參侍、

一 關白殿・左大臣殿・右大臣殿・内大臣殿等御參、

一 老中佐倉侍從備中守正睦朝臣堀田、所司代岡崎侍從美濃守忠民朝臣本多同伴參

内、參着雀間、兩役衆・昵近衆等有出會、

一 於小御所、有 勅答之儀、三公御出座、於下段召兩武士而被仰傳、兩武士退下、

一 兩武士、於虎間賜酒饌、傳奏衆相伴也、先鶴間東北隅屏風圍東南引廻、陪膳所役等如例、

訖而兩武士御禮申上退出、

〔非藏人日記〕

○東京帝國
大學所藏本

三月二十日、丙申、晴、當番議奏裏松大藏卿殿、其外參集、傳奏參侍、

安政五年三月二十日

七九三

堀田正睦本
多忠民ヲ伴
ヒ參内ス
小御所ニテ
勅答ヲ賜フ

一關白殿御參、
 一關東使老中堀田備中守、所司代本多美濃守同伴參 内也、於小御所、關白殿・三公・兩役等出座ニ而、墨夷一条 御返答有之云々、御殿御構、中下段間仕切之襖撤之、外側同開之、東西南等下格子撤置、同列御詰手取也、
 一御返答有之候後、於虎間賜酒饌、
 一出向相保・光表等勤之、

〔尙忠公記〕

○孝明天皇紀所載

三月廿日、亞夷一條御返答之儀、禁中へ堀田備中守并本多美濃守等被召、於小御所、被仰渡之、今度格別之御沙汰雖無先例、小御所中段ニ關白・左大臣・右大臣・内大臣列座、下段ニ武傳廣橋前大納言、當時人也、議奏久我大納言・德大寺大納言・萬里小路大納言・坊城中納言・裏松大藏卿等列座、東使・所司代等、武傳如例誘引、則正面於底板間目禮畢、正面下段ニ着座、次左大臣依目許、東使・所司代等、中段敷居内迄參進、御返答之折紙被渡、仰云、過日來段々御延引亞夷一條御返答、早々歸府可有之上、大樹公へ被申入候様ト云々、兩人共、中段ヲ下リ、敷居際ニテ折紙披見、如元卷之退出、其後於虎間、兩役面會有應接之事、且給御料理、先御返答之趣、退出之上、篤ト熟覽仕、其上ニテ否可申上旨、武傳迄申、兩人共退出云々、

小御所ニ於テ堀田正陸ニ勅旨ヲ傳フ關白以下列座ス

〔璞記〕

○一條忠香日記 宮内省圖書寮所藏本

三月二十日、丙申、○中略
 今日於禁中御所、小御所ニおゐて、堀田備中守、所司代本田美濃守被召、殿下・左府・右府・内府・武傳・議奏本役計列座ニテ、御返答書被遣候、左府公ヨリ被申渡御様子也、

〔中山忠能手記〕

○宮内省圖書寮所藏本

三月二十日、堀田・本田參 内、於小御所中下段、尙忠公・忠熙公・輔熙公・實萬公、光成・建通・公純・正房・俊克・恭光等卿列座、自左府、渡一昏、早大樹公へ可有進入被示仰、於諸大夫間、兩役和談、次賜酒饌、
 御暇、明日可給哉、内問之處、一昏、引取得ト拜見之上、可申左右旨、一兩日御延引願旨也、

〔御沙汰書ヲ指シテ〕
 右三月二十日、於小御所中下段、殿下・三公・兩役列座、自左府公、堀田備中守江被相渡、左府公口上、

先日之御返答、彼是御延引ニ相成候、早々歸府之上、大樹公江所司代候下段、被申入候様被仰下候事、

堀田正陸ニ勅答ヲ傳フ

左右由ニテ退出、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編
修局所藏本

三月二十日、

一東使御返答也、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國
大學所藏本

三月廿日、丙申、晴、○中
略、

今日、堀田備中守老中・本多美濃守所司代參 内、被渡 勅答、但、三公・兩役、列座小御所下
段云々、

〔坊城俊克日記〕○孝明天
皇紀所載

三月二十日、今日堀田備中守、本多美濃守同伴參内、先日以來之御返答可有之也、於小御所
左大臣殿申渡、授一紙給、先之關白殿中段東側着座給、次三公着同列給、予誘
引、次議奏一同下
段西側ニ着座、次武傳光成
卿誘引兩武士、了加着議奏列位、次此間兩武士於廂一拜、進下段一
拜、左大臣殿依御目進座下、授一紙、今度御返答彼是及延引候、別紙之趣早々關東へ可被申
達云々、○中
略、今日兩武士無御對面、賜酒饌、

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕○橋本實麗手記
伯耆橋本實麗所藏本

堀田正睦ニ
勅旨ヲ傳フ

三月廿日、丙申、晴、今日於禁中、 勅答備中守へ被相渡趣、御渡方之事、備中守施藥院江到
着之後被申聞云々、於小御所下段、殿下・三公并兩役列座、被相渡云々、且明日御暇被下之
旨、御沙汰之處、御猶豫之儀申願云々、

今日、三公已下現任一同建白、備中守江被下見云々、萬里小路亞相後日被語了、

〔菅葉〕○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

三月二十日、丙申、晴、○中
略、堀田備中守、今日參 内云々、入夜自中山大納言、御返答書被傳
越、外様同志之人こも、令傳覽了、

〔長谷家記〕○孝明天皇
紀所載

三月二十日、今日被召堀田備中守、於小御所中
段、殿下・三公・兩役列座、御返答書被授之處、
退于諸大夫間、以傳奏、尙勘考之上、奉此旨哉否之事、可及言上、申答云々、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記
宮内省圖書寮所藏本

三月十九日、晴、○中
略、

入夜戌半剋許、自武傳廣橋前大納言、以鳥飼觸、 家公江被告、家公、武家昵近非
役御第一云々、明日已剋、堀
田備中守・本田美濃守同伴參 内、爲心得被觸云々、依之、當勤昵近第一三條西中納言江出
會之事、任近例、令與奪給云々、

一堀田家來當家門弟、如初參 内、施藥院江衣紋掛雜掌代爲檢知出頭之事、兼而在契約云々、至亥剋比、無沙汰之間、左番長堀田旅館江寺町本能寺云々、行向、馬場志津馬面會之處、唯今方、明日已剋參 内之事、自所司代達有之、紛雜、自是可申賴書狀認中云々、点檢之事頼度云々、明日參 内御暇ニハ無之云々、從關東被申入之事、御返答之由云々、

二十日、晴、堀田備中守、老中本田美濃守等同伴參 内云々、

堀田正陸參
内ス勅答ヲ
仰渡サレ酒
饌ヲ賜フ

堀田備州衣紋見繕、小林右馬允狩衣行向于施藥院云々、如初參未剋許參 内云々、傳聞、出御方不被觸云々、非 出御之儀云々、於小御所中下段殿下三公兩役等列座、召堀田・本多等、自關東同支、御返事有之云々、其後賜酒饌云々、略、

廿一日、晴、略、

傳聞、昨日堀田備中守參 内、今度伺一条、異國打果トモ交易トモ、於 禁裏難被定、政務被任關東御時節、何とも被答仰カタク之旨被仰、堀田備州御請難申、猶勘考之上、又々御相談のト云々、中々御暇之沙汰無之云々、

廿二日、晴、略、

堀田備中守家來兩人來云々、

家公御面會、御狩衣、御宿徳、賜口祝云々、稽古一度致云々、堀田家臣依田十太郎闕服云々、馬場志津馬績平緒、今度御傳授、今日御直ニ被仰云々、

藏人細川家日次案

○細川常典日記
維新史料編纂會所藏本

三月二十日、丙申、晴、常存、當番辰半刻早參、

一此日、老中堀田備中守參 内、御返答、賜酒饌云々、

〔曇華院日記〕

○維新史料編纂會所藏本

三月廿日、丙申、晴、

一堀田備中守殿、今日參 内、墨夷之一條ニ付、再應之

勅答被仰達、然ル處、旅宿ニ引取、勘考仕度、歸府御暇之儀ハ、暫御猶豫相願度旨ニ有、退出之由、

〔庭田嗣子心ね得る〕

○伯備庭田重行所藏本

三月廿日、

堀田備中守事、先日カ御用の義にて上京致居、今日御返とう伺ニ參内、御料理給り候、御夕御膳ニハ御料理出ル、御さいめんハあらせ候、關白ヲ御參り、御さいめん、

〔中山績子日記〕

安政五年三月二十日

堀田正陸參
内料理ヲ賜
フ

三月廿日、

御き嫌御よし、堀田備中守御よと参内、

〔伏見
宮侍〕御牧家諸留
○維新史料編
纂會所藏本

三月廿日、堀田備中守

御所に 御召有之、則参 内有之候所、於小御所中段、關白九條殿・左大臣近衛殿・右大臣

鷹司殿・内大臣三條殿、下段議奏衆・傳奏衆御列座、近衛殿被 仰渡候御口上、

先日御返答彼是、○中
略、

近衛忠熙勅
答ヲ堀田ニ
下付ス

右御口上有之、則近衛殿より備中守に、御返答御書付御渡有之、且又傳奏廣橋大納言殿、現
任之公卿・兩頭之辨より被差上候赤心之上書、御取揃る備中守へ御渡、直に御暇之儀、可
伺申之旨御申之所、備中守、今日被

仰出候儀、篤と熟覽仕度候間、一兩日御猶豫被下度段被申上、退出有之候事、

〔三月〕
廿日、備中守参 内、於小御所、殿下・三公并兩役等列座、左府方被渡候御返答書、即夕一同

に回覽、

〔平安戊午記事〕
○維新史料編
纂會所藏本

三月廿日、堀田備中守殿、本多美濃守殿同伴参 内、於小御所下段、關白殿始三公列席、傳

奏・議奏何レも打揃、御返答被 仰出候、

〔佐倉藩戊午年集〕
○伯耆堀田
正恒所藏本

三月廿日、晴、

一例剋 御目覺、

一御出前、於御書院、原彌十郎様に御逢有之、

一五時御供揃、花色緘御熨斗目麻御上下被爲召、本多美濃守様御出門に御附人ある、四時

前貳寸御出宅、施藥院に御出、諸事先日之通、御衣冠に御召替、九時過、美濃守様御同道

ある御参 内、御使之御返答被 仰出、御酒饌御頂戴相濟、七半時御退出、又候施藥

院に御立戻、御熨斗目麻御上下に御召替、夫より廣橋前大納言様・九條關白様・鷹司太閤

様に爲御禮御廻勤、御歸家六時、

一御供

公御用人

金子 文 藏

御刀番

宮崎 生 駒

松永 吟 彌

堀田正陸本
多忠民ヲ伴
ヒ参内ス

安政五年三月二十日

八〇二

一施藥院に御先番

公御用人

淺井伊織

御衣紋方

依田十太郎

馬場志津摩

御案詞奉行

福與平橘

御近習

平賀左中

須藤秀之助

出野鎌五郎

御側小僧

大森巳之作

海老原凌甫

一御歸、直於御書院、御役人様方に御逢有之、

〔川路聖謨都日記〕

○宮内省圖書所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

(三月)

廿日 晴 備中守殿巳之剋御參 内。勅答之趣。御承知御歸之。○今朝ハ常之通之。腹

もへて。めし此味よろし。昨夕吐し故あるへし。九時よ備中守殿御旅亭へ。御待受と

堀田正睦參内

して參る。こ此躰よてハ。當月中此出立とあるへし。

廿一日 晴 昨夜備中守殿御歸と。六ツ頃之。夫よといろしと調物いし候。歸候と。

無間も九ツ之。今朝ハ例よ早く備中守殿へ出る。今日之様子よてハ。うしひら等取よ

せ候積之。中々歸府之程不相分候。

〔禁裏附大久保忠良伺書〕

○千葉縣内務部編堀田正睦所藏

○三月二十日武家傳奏廣橋光成へ

二十日、正睦、忠良を召して、左の書面を廣橋傳奏に贈らしむ、

今般爲御使備中守上京之節、於關東久々禁裏御始之臨時御進獻物も不被爲在候處、御使上京に付ては能折柄にも候間、御手元より別段禁裏・准后之御内々御進獻物被遊度、其外間白殿御始、堂上方等之被進物之儀、先達御手前様方迄私并都筑駿河守より及御内話候處、當時之處は先見合候様御挨拶之趣も有之候に付、相控置候儀に御座候、然る處折角關東にても思召を以被仰出候儀、其儘に相成居候は備中守に於ても不本意に有之、今日勅答可被仰出旨に付ては、右相濟候上は別段之御進獻物等差上候ても可然哉、且關白殿御始、堂上方等一同之被進物も有之候て宜御座候哉、私より内々相伺候様、備中守申聞候事、

〔武家傳奏廣橋光成通達〕

○堀田正睦所藏

安政五年三月二十日

八〇三

堀田ヨリ禁裏准后以下へ進獻物ニ就テノ伺書

○三月二十日禁裏附大久保忠良へ

文恭院殿御代中御同様、御したしく被仰進候段は御満足に可被思食候得共、此折柄内々御手元より御進献物之儀は、逆も御受被爲有間敷、然時は不斗御失禮にも可相当乎、但今度之儀にて之御進献には無之趣、關白殿委細御聞被成候、乍併若し人口にも相拘はり候ては不穩、却て公武之御爲にも不相成候間、暫御見合にて平常相成候後御進献候は、嘸御満足に可被爲有候乎、宜申入旨關白殿被命候事、

昨今ノ時態ニ鑑ミ幕府ノ進献物ハ受ケルヲ得ズ

〔福井藩士橋本左内京都報告書〕

○春獄文庫所藏本

○三月二十四日同藩中根鞆負へ

○上三月二十日、堀閣・所司代參内有之、別紙之通被仰渡、中堀閣、此節願て、兩三日相考御請申上度旨被申出候よし、被仰渡ハ申刻、退出薄暮過て相成候、中略、

廿日被仰渡之手續ハ、始於小御所關白・三公列坐、左府公書付御渡し、其節御口上之、勅答も延引て相成候、早速

致歸府、大樹公へ可申上との御事之よし、次ハ虎の御間と申處嚇としの第一、於て、議・傳御同席て双方及笑談、堀閣御請之處迷惑之由被仰候處、夫では違勅に相成候間、何分御請可有之との事にて、左あれば兩三日相考候て、人の智恵假る處、可然、御請可申上と申事と相極候よし、其節、

堀田正陸ニ勅答ヲ仰渡サル

傳・議々過日公卿八十六人の蜂起杯御咄有之候處、相濟候よし、下々の者は強情にて困ルト申、又申直し此節ハ御公卿とも御手強て困ると被申候よし、

○橋本左内京都報告書ノ全文ハ、三月十四日ノ條ニ收ム。參看スベシ。

〔安政戊午秘笈〕

○侯爵堀田仲博所藏本

京地探索書壹冊

○中略、

一去ル三月廿日、堀田殿參 内被 仰付、於 小御所、關白様・三公方御列坐、議 奏・傳 奏御立會三思ある、御返答被 仰出候處、御請申上、何と何故彼是被申立候様子と之風説御坐候、

堀田殿京地出立之日限、未一向相分り不申、中略、
一去ル廿日、堀田殿、御所司代御同道參 内被 仰付、賜酒饌、御返答、左之通被 仰出候旨、

○御沙汰書・口達ハ、上ニ掲ケルヲ以テ、之ヲ略ス。

〔鳥取藩士安達清風日記〕

○安達清文所藏本

三月念八日、早天馬場、

安政五年三月二十日

聖天子詔ヲ
幕府ニ下ス

安政五年三月二十日

八〇六

此日、京師邸報至、言、閣老堀田侯應對失旨、略、○中
聖天子陛下、下明詔于關東、責其失國體、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

三月廿日、

堀田 備中 守 殿

御所に 御召、小御所、○中略、

近衛殿被 仰出候御口上、別紙御渡有之、早々歸府、

大樹公に被申入候様、被 仰下候、傳 奏衆廣橋殿々、現任公卿々差上候赤心之上書御

取揃、備中守殿に御渡し有之、直御暇之義、相伺可申哉之処、篤々熟覽仕度候間、御暇之

儀、一兩日御猶豫被下度段、被御申上、退去之事、

〔堀口貞明筆記〕

戊午京都來狀之内、

一、三月廿日之儀、内々承合候廉之、多分御裝束所之、上段ハ御簾計之、小御所之出御無之よし、

之無之、尤中段殿下・左府公・右府公・内府公、御次第御列座之、下段久我・徳大寺・廣

橋・万里小路・坊城・裏松等六卿侍座被有之、備中守に之、御返答近衛殿御直之御渡、至

堀田ノ參内
ニ關スル風
説

る嚴儀之御事之、近衛殿別段之御意も被爲在候由、其後廣橋殿差引被在候、備中守退

座、於虎之間、傳 奏・議 奏不殘列座、尙又對話之節、現任之公卿并兩頭辨等、被申上候

赤心之上書、取揃有之候儘、廣橋殿被相渡候、濟る退出之事、○中略、

一、三月廿一日、在京之武邊ハ不殘、本能寺旅宿へ終日大評議有之、右評論江戸へ申來候ハ

ハ、定る大騒動之可相成哉之風聞之、尤墨夷之使節に之、所々之商館、既ニ關東表之御

許容相成候故、墨夷決る承知仕間敷、英吉利にも委細可申通、我諸侯方之内にも不同意

之衆相別レ可申も難計、左候ハ、内亂何方より歟生し可申哉、何モ六ヶ敷可有之、既ニ

當節仙臺より片倉小十郎、尾州より渡邊半藏、加州より前田土佐守、其外西國・中國・東

國共大藩より歷々多分内々上京致し、其節之應接其外共、密々探罷在申候風聞之御座

候、

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩士山寺源大夫雜記久保來復所藏本

京都表々之來狀之内寫、

略、○中

一 佐倉侯、今日 （本多忠氏） 御同道之御參内、御返答被 仰出候由、如何之御模様之相成候哉与

何モ申居候、御返答直ニ御暇被申手續定例ニ御座候処、御返答計之て、御暇之御沙

堀田ニ勅答
ヲ傳フ

安政五年三月二十日

八〇七

汰無之、御異例之御座候、右件々之次第之付るを、上之御心配被遊候御儀与恐察仕候、未御巡見後御遠慮故哉、不被遊候、跡爰之略ス、略、中

右來書ハ、塚田孔平ヨリ爲見來る、所司代若州藩臣ニモ可有之矣、

〔京都 儒醫 畑柳平書翰〕○如坐蒲船 居紀開所載

○四月十一日〔代筆〕恩田頼母宛

略、中別紙一冊ハ、荒増之實錄御座候間、内々入御覽候、万々一佐倉候杯にも御續キ柄も有之候哉之存候へ共、當地之事共可申上様被仰聞、極内申上候共、差支候方に御見セ被下候義ハ、決る有間敷と存候間此儘差出候、有志之外ハ、御他見之儀差略可被下候、〔案出〕どふぞ佐久間氏に之、聞セ度ものと潜之存居候、

卯月十一日

畑 柳 平

恩田頼母様

玉几下

○別紙

公武の實錄

略、中

〔三月〕廿日、依 召堀田殿參 内、於小御所御下段、關白殿・三公・議傳 奏列座、近衛左府公方御渡之書取、

墨夷之事、○中

御次之間に下り拜見之処、大之恐怖、戰慄難止之由、

歸府之儀ハ、御延引相願之由、被下酒饌、入夜退居、

○中

都る之件々、皆

睿慮方出候義故、一同恐入候事之承候、

〔吉田寅次郎書翰〕○富田武 一所藏本

○四月十二日僧月性宛

昨夜玄瑞・秋良〔久坂〕よりも書來り、廿日堀田參内之事申來り候、實之

天朝ノ正論不堪拵舞候、廿日勅諭之趣、外夷之事箱館・下田・長崎之外ハ、絶る來泊不被差許との事、堀田震慄拜伏退出と申事、

右之趣之候へハ、事已之迫り申候、秋良方委細申出候哉、勅諭も參り候由、未夕寫取不申候、別番之寫上候、

安政五年三月二十日

八〇九

久坂ヨリ堀田正陸參内ノコトヲ報シ來ル

政安五年三月二十日

八一〇

玄瑞（當世）先書ハ、文周（當世）ニ寫サセ上候様申付候、文周も中々憤發、藝國へも些ナリ正氣發候様致度積と相見候、御垂察可然御差圖可被下候、玄瑞・春軒（當世）共溜京ノ願之事申來、爰許て取計仕候、

先日申上候蕭海門（上題）之仙之允外一人ハ、直八（時山）上京ノ策、昨夜周布へ申入置候、賞典ノ議論、政府も面白相聞候、

久保外二子一昨日口羽（清太郎）被歸候、口羽も母病ナレ正國事類ニ苦心不口候きのよ、今朝（半光）來原舟木行、佐世・口羽へも參り候筈、詩稿ハ次便ニ託候、

何分私少々氣分相、特ニ大紛冗、不能詳書候、萬御推察奉願候、以上、

十二日

寅

白

清狂上人

座前

〔吉田寅次郎書翰〕

○吉田松陰全集所載

○四月十二日（幕府）品川彌二郎宛

聞、貴嚴膺賞典例、進班士列、賀賀、已而足下數日不來、可知賀客蟻集、酒食狼藉、勢不得舍去焉耳、日來驛使連至、天朝之盛事、誠可謂舉曠百代矣、而國家危急艱難亦莫甚于此時焉、

天朝ノ盛事

吾輩草間微蟲、萬不足言、雖然分盡己乃臣民之宜已、是豈酒杯大荒之時哉、仙之丞・直八皆有奮然上京之志、足下急々來塾、勿爲安坐、策問一道附往、他渾附面陳、回白、十二日、

村塾策問一道

恭捧讀今茲三月廿日 勅諭、天情畏 皇神、而重 列聖、恨 幕府交通墨夷、因更令

幕府、使三家諸大名竭心建言、事已行下、思 幕命不日下 吾公、吾公奉答固當有賢籌、何

待微臣過憂、然事實爲 國家安危興替之界、凡爲臣子者、義不宜愀然傍觀、若或辱下問、亦

將何以爲哉、諸君生平讀書、志固在 皇室、情常慨夷虜、其嘗疏所見、勿有不悉、以待下問之日、

戊午四月十二日

矩

方印

蘭國領事「クルチウス」Christus 淺草ニ出遊ス

○四月四日、マダ玉子ニ遊ブ。

〔蘭國領事參府掛目付鶴殿長銳達〕

外○維新史料編纂會所藏本
外務用録所載

○三月十九日津藩等江戸留守居へ

安政五戊午年三月十九日、

御目付鶴殿民部少輔様より、左之御廻狀、御別番共、堀石見守様衆方到來、寫留、佐竹右京大夫様衆を差廻、

安政五年三月二十日

八一

三月二十日
ノ勅諭ヲ捧
讀ス

安政五年三月二十日

八二二

明廿日和蘭領事官、別昏道書之通致通行候付、道筋屋敷々々より、家來相應之差出、見物之
者立留り、混雜致一候ハ、相制候様可被致候、尤道筋万石以下之面々にて、辻番所組合并
廻り場等之向に、通達可被致候、此段申達候、以上、

三月十九日

鵜殿 民部少輔

- 池田 信濃守殿(政詮、岡山支藩主)
- 戸田 紱之助殿(忠恕、宇都宮藩主)
- 松前 伊豆守殿(宗茂、松前藩山藩主)
- 酒井 大學頭殿(忠良、出羽松山藩主)
- 佐竹 右京大夫殿(義就、久保田藩主)
- 堀 石見守殿(親義、飯田藩主)
- 宗 對馬守殿(義和、對馬府中藩主)
- 藤堂 和泉守殿(高猷、津藩主)

いづきも留守居、

追啓、順達有之、留りより御徒目付當番所に可被相返候、尤道順之る相認候間、不順之有
之候、以上、

○別紙

眞福寺より藥師小路田村磐二郎屋敷脇前、幸橋御門外左に、芝口壹町目より、本町より兩
國廣小路、柳橋を渡、第六天前より御藏前通、正覺寺之る晝食、夫より淺草觀音境内、
歸路、雷神門より東仲町通、東本願寺脇手、新寺町通り左に、等覺寺門前より戸田紱之助屋
敷脇前、佐竹右京大夫屋敷前通り、醫學館前より藤堂和泉守屋敷前、和泉橋通り、佐久間町
河岸より、筋違橋御門、須田町通り、夫より最前之通、

〔海防秘聞集〕○維新史料編纂會所藏本

三月廿日、和蘭領事官并筆者、淺草通遊歩之節、奉納・買物等、左之通、

- 一金貳百疋
- 一金五百疋
- 一金貳百疋
- 一金貳朱
- 一金貳朱
- 一金百五拾疋
- 一奉納之まゝ候付、

安政五年三月二十日

晝休 榎寺 正覺寺
觀音 奉納
役領 事官 并筆者
貝細 工見を物
生人 形見を物
觀音 小 九 御影
大 觀音 九 御影
供物 御影 二 箱幅

八一三

安政五年三月二十日

八一四

一銀九拾匁
 一銀貳百三拾匁
 一金貳百五拾疋
 一錢六貫文
 一金壹分三朱
 一銀七拾匁
 一金六兩
 一金三兩
 一貳朱ト百七拾貳文、
 一銀百拾貳匁々八拾匁迄之内、
 一八拾壹匁々
 一七拾七匁迄之内、
 一同百貳拾匁々百六匁迄之内、
 一六拾三兩三分ト六匁四分

箱入 蒔繪 徳利 本
 猪口 十二ツ、入大箱
 小箱 七、七
 錦繪 百六拾五枚
 女舟 遊ひの圖
 數色 細工 根々
 紅植 葉・つ 三
 手 遊車
 鉢 壹付 長角植木
 植染 木付 鉢地 一紙ツ形
 硝子 德利 二ツ
 縞 郡内 拾疋
 縞 八 丈
 白浮織 八 疋

〔出羽松加藤一格日記〕
○東京帝國大學所藏本
 ○山藩士

三月廿日、

蘭人通行

一御門前蘭人通行之付、
 御隱殿御物見に召、依る疋田殿兩人之ゑ、柏餅一重差上之、
 一右之付、田口へ子供參候付、かしこ餅一重遣ス、

〔高麗環雜記〕
○東京帝國大學所藏本

三月廿日、

一蘭人、淺草に行、

〔飯泉喜内書翰〕
○維新史料編纂會所藏本
 ○伏見宮侍御牧家諸留所藏

○三月二十六日 高橋俊壽宛

略、廿日こそ、領事官淺草觀音參詣、亞人之時之通、是も見物人夥敷、雷門内床見世こゑ、もて遊びもの錦繪等、澤山と相求申候、凡拾八兩余之品々買申候、觀音にも、亞人同様參拜、五百疋上ケ候由之御座候、奥山見物等も、亞人之時之通こゑ、矢張門跡前々下谷三味線堀へ出、通り筋歸宿申候、然るよ、歸宿後亞人を客と招き有之、八ツ半下り々、亞人旅宿蕃書調所へ出、右眞福寺へ參り、夜中比歸宅之由、下田手附之をの附添參り候事こゑ、私知る人あとも、歸宅八ツ比之由、翌朝參り候処、まど寝居る處へ參り申、待居候る様子承り申候、此程之條約之催促、今日言う明日言くと、むや／＼ものこゑ何ても言通りこゑ、出歩

蘭國領事淺草觀音ニ參詣ス

安政五年三月二十日

八一五

安政五年三月二十日

八一六

致さへ候事之候由、○中略

三月廿六日

風 艸 拜

不 爭 御 主 人

机 下

(近衛家書類 中山忠能履歴資料)

○四月四日「クルチウス」王子ニ遊ブ。次ニ其ノ史料ヲ收ム。

〔蘭國領事參府掛目付鶴殿長銳通達〕

○内閣記録課所藏本 安政年録所載

○四月三日町奉行へ

四月三日、○中略御目付觸、

蘭國領事通行道筋取締ノ件

明四日、和蘭領事官、別紙道書之通り致通行候間、道筋屋敷々々々、家來相應之差出し、見物之者立留り、混雜致し候ハ、相制可申事、右之通、道筋屋敷々々に、相達候間、此段御達申候、以上、

四月三日

鶴殿民部少輔

道筋書付

蘭國領事通行道順

眞福寺ノ藥師小路田村磐二郎屋敷脇前、幸橋御門外・御堀端通、八官町・數寄屋橋御門ノ鍛冶橋御門・吳服橋御門前通り、常盤橋御門外ノ右に、本町貳丁目ノ須田町通、昌平橋を渡

り左に、夫ノ右に、湯嶋壹丁目より本郷通り、駒込肴町ノ右に、四軒寺町・團子坂邊植木屋に立寄、夫ノ御鷹匠屋敷後通り、神明脇より富士前町に、右に染井邊花屋とも立寄、富士前町迄引戻し、妙義坂ノ飛鳥山下通り、王子、歸路、飛鳥山下通り、吉祥寺前通りノ肴町、夫ノ取前之通り、

〔海防秘聞集〕

○維新史料編纂會所藏本

四月四日、五半時頃、和蘭領事官并筆者蘭人共、王子邊に罷越、夕七時過歸宿、道筋、眞福寺ノ藥師小路田村磐次郎屋敷脇、幸橋御門外・御堀端・八官町通、數寄屋橋御門外、鍛冶橋・吳服橋御門外通、常盤橋御門外右に、本町二丁目ノ須田町通、昌平橋を渡左へ、湯嶋壹丁目・本郷通、駒込吉祥寺前、肴町ノ右へ、團子坂植木屋共へ立寄、夫ノ御鷹匠屋敷後口通、神明脇ノ富士前町右に、染井邊花屋敷に立寄、富士前町迄引戻、妙義坂ノ飛鳥山下通、王子、歸路、飛鳥山下通、吉祥寺前、元之道筋、

茶代

茶 代

- 一金壹分 植木ヤ 右平治に
- 一金壹朱 同 梅次郎へ
- 一同貳朱 同 六三郎へ
- 一金壹朱 同 桑 作に
- 一金壹朱 同 金五郎へ
- 一金三分 晝喰所海老ヤ

安政五年三月二十日

八一七

蘭國領事王子ニ出遊ス

安政五年三月二十日

八一八

一金貳朱 神田明神茶や

梅次郎方ニ有買物、
一金五兩 錦魚鉢貳ツ

留次郎ニ有同斷、
一金壹分 藤牡丹壹鉢

衆藏ニ有同斷、
一金拾兩 植木鉢貳組 但九組ツ、

金五郎ニ有同斷、
一金壹兩壹分 蟻通一貳鉢

小右衛門ニ有同斷、
一金貳分貳朱 猪子貳ツ

× 拾八兩貳分壹朱

〔八條隆祐手録〕○宮内省圖書所藏本

四月上旬、

一和蘭領事官、王子筋へ参り、海老屋借入、向座敷ニ罷在候處、同家女共こわあり、側へ参り候もの無之處、領事官一人之女をつらまへ、自分ニ指輪をめぐれ、夫々女中皆々罷出候よし、尤食物者石丁之長崎屋源右衛門方、道具・食物とも持参、おもに肉相用候由、役人中山誠一郎、又名主とも附添居、是者自分辨當なる、次之間なる仕度相用、領事官一人者腰かけ、シツボク臺なる、七よて食事致候由、右海老屋女中へ、不殘指輪一ツツ、くれ、猶亭主へ葡萄酒、フラスコ之儘壹陶吳候趣、夫より飛鳥山に参候處、諸處之者遊山ニ参り居候者之内、かねを付候女ニハ、夫有之と心得、一切構不申、唯白齒の娘見受候得者、引ねさへ自分ニ指輪をめぐれ申候、皆々驚きに候得者、附添居役人聲をうけ、決して驚き候に不_レ及、指輪をめぐれ候間、参り可申と申聞候に付、安心致し候由、夫々染井之糸吉と申植木

蘭國領事王
子出遊ニ關
スル聞書

屋へ立寄候處、右糸吉石菖自慢なる、澤山所持致し、百兩位のも有之候品、領事官ニ見せ、其外品々見受、一對なる十兩程之鉢相求メ候處、右糸吉娘白齒なる、領事官へ茶持出候處、例の指輪をめぐれ、懸りの者へ、右女百兩位ならハ相求度、相談以てしくれ候様申候よし、夫々神田はしりけの水茶屋なる相休罷歸り候由、其節付添参り申候白山丁名主房次郎申聞候、蘭人といへとも、中々志やれ申候事ニ御座候よし、相嘶し申候、

○附 録

○「クルチウス」眞福寺滞在中、溜池馬場ニ於テ乗馬ヲ試ム。次ニ其ノ關係史料ヲ收ム。

○三月十二日老中松平忠固へ

○長崎縣廳所藏本
和蘭領事官參府御用留所藏

〔朱書〕三月十二日、伊勢守殿、右以上ル、同十三日、早川庄次郎を以御下ケ、承付之上、同十五日、返上。

和蘭領事官乘馬并馬具共買入度旨

申出候付奉伺候書付

蘭國領事乘
馬及馬具購
入ニ就テノ
伺書

和蘭領事官儀、乘馬壹疋、并馬具一式買入度旨申出候、尤右々御條約長崎會所方御渡之品ニ付、右之格見合、於當御地早々御渡被下、滯府中相用候様仕度由、申出候、依之此段奉伺候、以上、

午三月

安政五年三月二十日

六 名

八一九

安政五年三月二十日

○指令

覺

伺之通、可被取計候事、

〔蘭國領事參府掛并長崎奉行伺書〕○和蘭領事官參府御用留所藏

○三月十七日老中松平忠固へ

〔朱書〕三月十七日、伊賀守殿に、佐藤清五郎を以、別達濟、

和蘭領事官乘馬爲致候馬場之儀ニ付

相伺候書付

六

名

和蘭領事官儀、馬買上度旨申立、伺之通被仰渡候處、爲見馬仕候節、乘試度旨、且奉參り候もの爲乘見候節、溜池馬場并最寄明地調練場に差出、爲乗可申哉、且以來乘馬之儀申出候節、支配向之もの兩三人、右場所に差出候様可仕哉、尤達向等之儀、民部少輔取計可申候、依之此段相伺申候、以上、

午三月

六

名

○指令

〔朱書〕三月十八日、御同人御下ケ、

覺

伺之通、可取計候事、

〔川越藩日帳〕○伯耆松平直之所藏本

三月廿一日、晴、○中

蘭國領事溜池馬場ニ於テ乘馬ヲ試ムル件

蘭人乘馬ニ溜池馬場使用ノ件

蘭人溜池馬場ニ乘馬ヲ試ム

一御目付鶴殿民部少輔殿方、御城中之口に御呼出ニ付、小笠原源次罷出候所、御徒目付組頭田中勘左衛門殿、御小人目付栗嶋彦四郎出席なる、阿蘭陀領事官ヒツィキヤク、今般溜池御預所なる、馬稽古願出候ニ付、願之通り被仰付候、爲心得御達被成候旨、勘左衛門殿被申聞之、就る考兩三日之内、稽古罷出可申候へ共、何時方罷出候哉、廻限も不相分候、且右ニ付ると、人立等も可有之候得共、先ッ松平肥前守様辻番所、并御組合葵坂辻番所なる、相心得居、相制し候ハ、可宜、猶模様ニ寄、御達被申候旨、被申聞之、

但、松平肥前守様・戸田采女正殿にも、同斷御達有之由、

〔長崎奉行岡部長常上申書〕○和蘭領事官參府御用留所藏

○三月二十六日老中松平忠固へ

〔朱書〕三月廿六日、伊賀守殿に、佐藤清五郎を以、上ル、

和蘭領事官に乘馬一見爲致候儀ニ付

申上候書付

和蘭領事官、乘馬乘試場所之儀、兼る伺濟之通、溜池馬場ニ於て、明廿七日一見爲致、乘試をも爲仕候、尤役々附添罷越、道筋別紙之通行爲致、万一雨天ニ候得と、日送り之積ニ御座候、依之此段申上候、以上、

三月廿六日

岡部 駿 河 守

別紙道筋書略之、

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩土山寺源大夫雜記

戊午四月八日、來書抄、

亞使一件、京都の模様、何分取留不申、一日〱と及延引候、再出府以來も苦々敷事而已、實ニ絶言語申候、セめての事ニ、京都案内御手強之より、難有奉存候、蘭人溜池馬場ニて、日々馬ニ乘申候、御添屋敷隣眞福寺旅館ニふり、明渡ト

安政五年三月二十日

安政五年三月二十日

御坐候、年名左之通、

八二二

和蘭領事官 イハドンクルキエルシユス 歳四十五
同 書物役 クルーファンボルスブルツク 歳廿四
外ニ下部四人

五月廿六日付、江戸來書抄、

一蘭人いまと逗留、天氣宜節ハ、榎坂馬場にて、馬乗いとし、跡にて見物の女子にへ、指輪一ツ宛遣候、尤眉毛有之女子計へ遣候、馬ハタクニ走ラセ候処、中々達者ニ御座候、

○「クルチウス」江戸繪圖・東海道・中山道 道法早算道中記、日本・唐土・朝鮮・琉球・松前・蝦夷・九州ノ地圖ヲ購入センコトヲ請フ。幕府、江戸繪圖・東海道・中山道 道法早算道中記・蝦夷全圖・九州地圖ノ購入ヲ許ス。次ニ其ノ關係史料ヲ收ム。

〔蘭國領事參府掛并長崎奉行伺書〕

府御用留所藏

○三月老中松平忠固へ

〔朱書〕三月十五日、伊賀守殿、早川庄次郎を以御下ケ繪圖並册帳、

和蘭領事官地圖類并翻譯之書類

買入之儀ニ付奉伺候書付

六 名

和蘭領事官江戸繪圖、并日本國之地圖、其外翻譯之書類買入度旨申立候ニ付、勘辨仕候處、條約附録第十六條之内、書籍并地圖類・銅器類、右ハ會所取引之外、商人方賣渡不相成、尤市中ニ見當リ、又モ賣込人方當用丈ケ買入之分ハ差

蘭國領事地圖并翻譯書
購入ニ就テ
ノ伺書

支ふといへとも、若法度之書籍・圖面等有之節ハ、差留急事と有之候間、右心得ヲ以、差支無之分ハ、掛役々立合改之上、相渡候様爲取計可申哉、此段奉伺候、以上、

午三月

六 名

○指令

覺

書而江戸繪圖之儀、先達る亞米利加使節ニ相渡候節、下田奉行ニ相達候趣ニ相心得、其外伺之通取計、追る相渡候書名等可被申聞候事、

書 抜

去巳十一月、

亞墨利加官吏儀、江戸繪圖渡方相願候由、是迄先蹤も無之事ニ候得共、今般出府御差許、

御目見も相濟、市中一見も爲致候上、申立之趣無餘義相聞候、乍然、右ニ彫刻ハ、世上ニ傳播等致候様之儀、有之間敷候得共、心取違ひ無之様精々申諭、相渡候様可被致候事、

右之通、下田奉行ニ達之、

〔蘭國領事參府掛勘定奉行土岐朝昌等掛合書〕

○帝國圖書館所藏本
外國事件書所藏

○三月十五日町奉行へ

〔朱書〕三月十五日、差遣候由、向方ニ到來、下ケ札付、翌日朝、使之ものへ返、

土岐 攝津 守
永井 玄蕃 頭

安政五年三月二十日

八二三

安政五年三月二十日

町奉行衆

塚越藤助

八二四

江戸繪圖ノ件

先般亞墨利加使節へ御渡相成候江戸繪圖、池田播易先勤之節、新規摺立御廻し相成候分、猶又貳部早々摺立差上候様、伊賀守殿、早川庄次郎を以被仰渡候間、宜御取計有之候様致度存候、依之爲御見合、別紙御下之繪圖面一部相添、此段及御掛合候、

午三月

御書面御掛合之趣致承知候、繪圖面貳部摺立之義、即刻其筋へ申渡候間、差出候ハ、早々御廻可申候、依之爲見合被遣候繪圖返却、此段及御挨拶候、

三月十六日

伊澤美作守

町奉行伊澤政義通達

○三月十六日蘭國領事參府掛勘定奉行土岐朝昌等へ

〔朱書〕
〔午三月十六日、繪圖貳部相添、差出ス、〕

土岐攝津守殿
永井玄蕃頭殿
塚越藤助殿

伊澤美作守

蘭國領事ノタメ江戸繪圖ニ部ヲ刷リ提出ス

昨日御懸合有之候先般亞墨利加使節へ御渡相成候江戸繪圖貳部、早々摺立差上候様、伊賀守殿、早川庄次郎を以被仰渡候ニ付、各様方へ差進可申旨、御申越之趣承知以爲し、則爲摺立候江戸繪圖ニ部差進申候、尤御下之繪圖ハ及返却

候ニ付、不致突合差進候間、御見改之上、御差出有之候様存候、此段及御達候、

午三月

〔長崎奉行岡部長常伺書〕

○三月二十九日老中松平忠固へ

〔朱書〕
〔四月三日、伊賀守殿に上ル、同五日、御書取御答御下ケ、翌六日返上、〕

和蘭領事官地圖類其外買入度旨
申立候ニ付奉伺候書付

岡部駿河守

蘭國領事地圖其他購入ニ就テ伺書

一東海道道法早筭道中記

一唐土地圖 朝鮮地圖 琉球地圖
一松前地圖 蝦夷地圖

右之書類買入度旨、和蘭領事官申立候間、爲買入可申哉、此段奉伺候、以上、

三月廿九日

○指令

〔朱書〕
〔四月五日、伊賀守殿、御下ケ、〕

別紙道中記、蝦夷全圖ハ相渡、其外及斷候様可被致候事、

〔長崎奉行岡部長常伺書〕

安政五年三月二十日

八二五

道中記及蝦夷全圖ノ購入ヲ許ス

安政五年三月二十日

八二六

○四月老中松平忠固へ

〔朱書〕
四月九日、伊賀守殿、佐山八十次郎を以御下ケ。

和蘭領事官九州地圖買入度旨

申立候ニ付奉伺候書付

岡部 駿 河 守

一九州地圖

右之地圖買入度旨、和蘭領事官申立候間、爲買入可申哉、此段奉伺候、以上、

午四月

○指令

覺

伺之通、可取計候事、

○四月三日、「クルチウス」其ノ旅館眞福寺ニ「ハリス」ヲ招キ、柳川一蝶齋ノ奇術ヲ見ル。次ニ其ノ史料ヲ收ム。

〔海防秘聞集〕○維新史料編
幕府所藏本

四月三日、愛宕下眞福寺蘭人旅宿に、柳川一蝶齋事大次郎呼奇、和蘭領事官、亞墨利加使節相招、通弁官并筆者を見物

爲致候節、番組、

一三番叟振分之形

一浦嶋通ひの玉手箱

一京土産ひよく拔の一曲

一石清水八幡之弓勢

一當り米叶福助、但を美化人形

一拾六羅漢子持ゑる様

一曲、まの一曲

一風流曲、まの一曲

一白紙玉子の放生會

一かんさん夢の枕

一津嶋祭夜の境内

一半田稻荷利生の玉

右ニ付、領事官方柳川一蝶齋に、金貳千七百疋遣候由、

〔代竹垣直道日記〕○維新史料編
幕府所藏本

四月三日、晴、

一○中番書調所見廻、○官吏・通弁官四半時過出門、眞福寺蘭人旅宿に相越、○九時前退散、

安政五年三月二十日

八二七

蘭國領事九州地圖購入ニ就テノ伺書

九州地圖ノ購入ヲ許ス

蘭國領事眞福寺ニ米國總領事ヲ招キ柳川一蝶齋ノ奇術ヲ見ル

大日本維新史料 第三編ノ三終

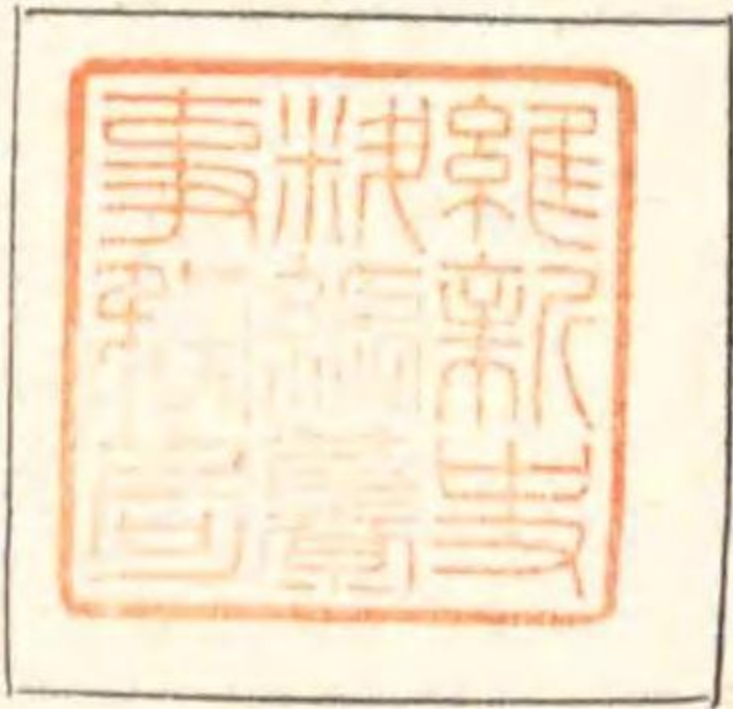
(第七回刊行)

昭和十四年十月二十八日印刷
昭和十四年十月三十日發行

(大日本維新史料第三編ノ三奥附)
定價 八圓

發行者 維新史料編纂事務局

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八番地 君 島 潔
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 共同印刷株式會社



發賣所

東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院
電話 神田(25) 二一四七番
振替口座東京 四九九一番

